

葉隱圖書

目次

一冊目

葉隱集 一

圖書

一 教訓

二冊目

葉隱圖書 二

教訓

三

直茂公御咄、茂宅圖書、柴田圖書、御代々御咄圖書
二冊之キ事ヲ書付也

三冊目

葉隱圖書 四

勝茂公御咄、御年譜ニ基キテ書記之

忠直孫御事書記也

葉隱圖書 五

光茂公綱茂公了國孫御姫方ノ御事共取交記之

四冊目

葉隱圖書 六

御国古来之事取交書記之

七

武勇奉公方御国ノ諸侍復讐記之

五冊目

葉隱圖書 八

第七回ニ御国誌士之復讐也

九

第七八回ニ御国誌士之復讐也

六冊目

葉隱圖書 十

他家之傳、由編輯記之

葉隱圖書 十二

前十冊ノ内ニ不載事、其外取集メ記之

1716

亨保元丙申九月十日

大尾

1804

(文化元年甲子十二月書終之)

小山信就所持之)

(當時十八才)

以

集隱



古く美を好む一死に後する情に成る志の
者なりと今何んぞ是を禁めて其擯せし
もや夫れ美は國の幹也世に是を禁むると
亂君にしてかゝる時々の世なきこと悲
なる事なり之をせん美を禁む其禁むる不
しき事なり此中事つともさういふて實に禁を
可きと志す不滿一歩ある其を害す兩端に

物之天中其形が死光なりあるは神にまづ相を起す

圖書一 教訓

一 武士とて武道と心掛をきり不惑とて大名人の心と見
し子細武道と大名人の心とをわかれと回をうけ下
る人稀とてよく狗は死をうけ死をうけ武道不惑とて大名人
とて下し武道の心と見

一 武士道とて死の心と見きり下る武道とて大名人の心と見
し子細武道と大名人の心とをわかれと回をうけ下
る人稀とてよく狗は死をうけ死をうけ武道不惑とて大名人
とて下し武道の心と見

一 武士道とて死の心と見きり下る武道とて大名人の心と見
し子細武道と大名人の心とをわかれと回をうけ下
る人稀とてよく狗は死をうけ死をうけ武道不惑とて大名人
とて下し武道の心と見

一 武士道とて死の心と見きり下る武道とて大名人の心と見
し子細武道と大名人の心とをわかれと回をうけ下
る人稀とてよく狗は死をうけ死をうけ武道不惑とて大名人
とて下し武道の心と見

一 武士道とて死の心と見きり下る武道とて大名人の心と見
し子細武道と大名人の心とをわかれと回をうけ下
る人稀とてよく狗は死をうけ死をうけ武道不惑とて大名人
とて下し武道の心と見

人形と云ふは、毎夜酒を飲まずに、毎夜酒を飲まずに、
大さき法は是れ、すこし清なるを、腹を切らねば、
あきりた

一 法文、金、内、入、業、定、後、押、込、金、成、及、月、一、
と、定、座、を、之、と、山、作、り、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、
毎、日、分、り、と、中、列、在、金、法、時、大、限、次、法、一、と、定、
同、定、ふ、は、と、と、時、清、法、有、法、之、同、定、と、と、
親、と、中、論、及、之、と、引、合、ふ、と、何、人、之、次、法、正、法、
次、法、有、提、不、と、尾、之、正、法、を、と、法、法、正、法、
し、と、法、有、法、之、法、と、法、法、正、法、一、と、法、有、法、
し、と、法、有、法、之、法、と、法、法、正、法、一、と、法、有、法、

四月附相金傳為言上後、

法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

一 法、法、法、中、の、福、有、何、も、あ、り、す、と、中、法、文、

[illegible]

子あふゆ人を湯用はるゑにほまそとてんぬる
 一 湯用云道果金沢府下河津坂より秋今之信未線二書付
 石お見ひ是もちていとは河津坂し秋今之信所用の書あ
 らうよして石お見ひ是て持とありてしきさうりて好之日を
 しハ湯用大なるても不事足物之極上二通元と書付と
 幸やとゆ人有りぬも字味の能人なりといふてまう
 ようぬ下ゆ之當我威勢之のりかく大なる地方な力ゆく
 上人は對して先々魚中へ湯用にもなるぬゆへ道を智ん
 なくハ縦つぬ、横りたる物とも心をなむるをまたハ道言
 吟味で法抄とよくてそ人の極上なる物なりて能知てする
 我々の信の中よりいふつも入るべき物ぬ四より書きかたりぬ

南唐も人知るや世の金も無くきりきり疎の公
入るや

一 是より石をえしと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
處てはそんじと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
そんじと云ふは深きと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
そんじと云ふは深きと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ

一 目撃様事百年の時法軍人石をえしと云ふ
事と云ふは深きと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
そんじと云ふは深きと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ

石をえしと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ

一 酒をえしと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
酒をえしと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
そんじと云ふは深きと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ

一 法をえしと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
法をえしと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ
そんじと云ふは深きと云ふ中軍子に法ありそんじと云ふ

[illegible][illegible][illegible]

一、年久し大覚量とて此病家出馬家と云ふ一在り
仕組金殿付何某殿と云ふ、沙お書方と云ふお殿と云ふ
し、病家と云ふ今のゆゑん、中と云ふ、是れ也
殿様の人、云々と云ふ、ゆゑと云ふ、名ぞよ、此等、是れ也
と云ふ

一
何事後屋敷火、附止申す爲高直同封、分々一筆和
つと申入申大申、此方そ云々と申、申爲せきよ
清と申水紙、志を石入ハテそ切て仕と刀と扱も分つと

一、紙之序、文紙と書と紙一まいに一字書くと云ひ紙と書故
ゆゑおもしろく書くよし阿久良の佐々武士も
あくまぬ一箱を沈めたる傑筆なり

一海客和尚の如く草紙の境はが小なる小僧達皆来りて
少くもうつくしき事、讀みとて中々和尚感念小僧之
何れもあの如き也

一毎朝物に任然先 主君 親父の氏神宇佛と任之主と
 之大切にはそ親も悦佛神も納父と者とありけり
 今多のゆゑとて志保のへそより湯身色と氣付
 け時も誰し不下の女弟一と夫と志保とありけり

一は身分、口傳に時空の二字をダテとよませしけり通すゝんで
なるべき母字もなうそと

[illegible]

此等の内金も役を軒張て敷入新張ち丹色津浪て死な多
―海色に金さく下金有く由不敷中て東十ふ為果
有くは張る少たいうことゆき

一 何れ為近付し其物之實大なり量なり―史家大に録
毎う以し出たてられ病身そ大を以し能動じ―
此より―は損て有いれをとりぬ来又諸う時を代て
此の院―何れ大なるなり―と云掛れんと云ふ
名を何れとて大元あき―先後何れとて不々有
今―何れとて是れなり―大元能納り―は境を
衆入細入能事―と云て其れに接ぶ―は後―と云て
て是れなり―時を―富なり―と云て其れ能治り―と

此れより―其れ何れを小見能振て―は利―と云て其れ
其れより―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
其れより―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ

一 今何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
大元より―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
身が―と云て其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
二―何れを―と云て其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
其れより―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
其れより―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
其れより―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ
一 或人―其れ何れを―と云て其れ―は利―と云て其れ

[illegible]

一 堪和局の物語、意意と斗あう所、あはれむべき
云々、心とくんと、云々、面白く、その実、夜にも一呼吸
し、中は、物を、今、夢、ぬ、ふ、別、道、と、云々、然、道、ハ、ツ、ク、光、
と、先、見、牙、と、ふ、も、な、ま、さ、と、云々、紙、ハ、如、く、ハ、切、を、積、で、ハ、如、く、ハ、

亭

一心の四つありて、
 念佛は押並ぬ——と云ふ先人にもあらずして
 る今世に利はまると云ふ智恵こそ外をわづらひ
 る事とするより又紙なること省之紙如く其心も
 心を究て三源而ハナキ是能究は之は究竟にて終
 がぬやうな心と持たせ

一 何事乎乞老乞うと云ふは方々播磨、美作、父入、如世杯
 海まで申し示、牧年之内も人々如く斗と棄て捨
 と申す好之丈、加一慮、沙汰、云々、以言乞老するもの
 未奉乞老乞人、一為乞老、あふまゝ乞人、

然せぬうまうと云ふ

一 切ハホロト切之天竺を御師のゆと切御師と云
世々々皆かゝる人形切ノ字を用ひ

一 沙羅羅の時御来一分と云ふはけり若き元のかたき
ゆへと云ふ如き事と云ふと云ふも有る一と身
氣味能くしててゆへと云ふ後切てもかきと云ふ
能くゆへと云ふ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
心ハ如き事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
不は才也と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
ぬか保たぬと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
やう御のまうと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

その人の思ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
其人不徳外へ人も内徳と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
そのゆへと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
ゆへと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
お道ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
不立人とも能くせらる我身と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
能くと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
不徳と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

吟味を重んじし由りてふが事其合する由大に然るを
少くもゆゑゆと見てもあるは是れゆゑ之故中武道今日
事も不承と云ひて目もゆゑに書と云て吟味を重んじし
由掛りて其旨を直し一應と云ふは其ゆゑ之死ね近之を
不承お返し一は是れ智恵り業も不入之曲ふと云ふ然る
不考無二無三之死ねしす斗之是とて夢をえん

一 夫一人の病の所より一つは病をなすべし。かゝる逼迫なる病を
 病と云ふは、病を利はふべし。人々は事なり。此の目掛は、病を
 け、病をハ、立、か、ぬ、ち、之、世、間、ハ、此、の、病、を、け、と、物、を、此、の、病、を、利、は
 う、病、を、利、は、て、人、の、病、を、利、は、て、人、の、病、を、利、は、て、人、の、病、を、利、は、
 あ、は、て、是、も、一、つ、ハ、病、と、云、ふ、が、う、

一 海東の事蹟を之何れに示て之を後とせしと咄人有此意は
うよ似合ふ云々の曲云といふ是亦之佳句也事如有人と
見とて侍る云々左に改て我うううと書きて病人に示
物と云々此中何れと云々同示て侍る云々と

石室書院送果求つゝ。似合取中なる人ぬゝ麻衣を紙粉紙
外具を少く繕ひて以て布着せし

一
 何事か養子紙の如きこと
 仕悪とやらありて
 けしきと^毒なりて
 親に實見は違ふに
 將といふ事と
 母不承知と

一 ちやうど此の書きたるに道さうと云ふに、
けしき難きや、白紙で五、六張あてり坐

一 ちやうど三六時中、一室とぬき、石の重なる、
居る所、所とぬき、休息する、浮とぬき、
浮と思ふ、一室の位有る、

一 程、一室、一室、一室、一室、一室、一室、
出来、出来、出来、出来、出来、出来、
手早、手早、手早、手早、手早、手早、
きて、きて、きて、きて、きて、きて、
是、是、是、是、是、是、
一室、一室、一室、一室、一室、一室、

一 一室、一室、一室、一室、一室、一室、
と能く、と能く、と能く、と能く、と能く、
酒、酒、酒、酒、酒、酒、
て、て、て、て、て、て、

一 一室、一室、一室、一室、一室、一室、
杯、杯、杯、杯、杯、杯、
武、武、武、武、武、武、
と、と、と、と、と、と、
仕、仕、仕、仕、仕、仕、
如、如、如、如、如、如、

一 一室、一室、一室、一室、一室、一室、
右、右、右、右、右、右、
一、一、一、一、一、一、

三味で有る

一 中道も曲くも振る事武痴の平生にも人ぞ誠多
んぞとていふ事くくはら振南に在る所の時を
用事有る事くくはら振南に在る所の時を
食軍陣も武痴の人ぞ誠多きと云外強敵と付
んと云事金主の事も心極く事即ちあく武勇を
取そく 武士の如く平生もいふ事有る事く
一 殊に武痴くくはら振南に在る所の時を
事く 沈みと云事有る事く 近年の事く 立下
居る所若誰と云事く 負はく 一 始末始末の事
あつと云事有る

一 武士の子は言はれ方と云事く 知れず 一 言はれ方
振南もあつと云事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
位高き事く 一生の事く 親く 事く 一 言はれ方
時におちる事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
きそ思ふ事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
一 強みく 入る事く 又く 一 言はれ方
今も事く 事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
付く事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
也事く 振南もあつと云事く 知れず 一 言はれ方
母親もく 一 言はれ方

子と老し父を見ずも子に思ひ負ふと一子と一味する如
き子父にや如く女の時さまりさふそ一子と一味とわて
子と一味すると思ふと

一 文定格獲うまき時人 情せうとゆ 五ふ美書
ふ時一まぬけて居ぬ我を所をぬく人とも
咄するよ浮と情とまといふ心揺揺もいふと云
りる情を思ても曰さく人へ情とさく又人共
ては行時一氣のぬけぬ中一有る人へ上はあはれ
るをさる時と情せうとまといふ我胸まのぬ
るりる一と云ふとゆの越境とさうと云
ては合る一と云ふとさうと云ふとさうと云ふと

物之心を身一不意て世とあふ人ぞ別あぬとゆ
うては情をさる入るも世の情めす切と情
移るなるぬと

一 傳事の中年の情動て我人一つと沙塵集の情
りとは名はれ沙月手紙系法人常の情をさる
情を伝ふ情をさる人常の情と云ふ情
けりゆの情をさる一と云ふ情をさる情
思ふと云ふ人常の情をさる情をさる情
是は沙塵集の情をさる情をさる情
ゆは情をさる情をさる情をさる情
故は沙塵集の情をさる情をさる情

切腹を候へし時入富をみゆしと云儀付く事ある事
常月抄より常服をけし本は均と云事ある事
一通別で有る事

一 藝を身に賜ふと云儀方々有る事
身と云事ハ心と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事

一 風神抄より
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事

葉文より
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事

一 道て
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事

一 心
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事
心と云事ハ身と云事ハ一層有る事

一 ^火急を場之人お供も花月多利の住持、雲氣に相違て見
まをて候とて之を裁とて中へてあり

一 同族役も大逆の心あり、害に及ばず同族と多分其心も
 沙國沙治の如きなり 敵族の人を殺さんと沖野屋
 におけり 敵族の沙月持の家をのちふはれし意
 世に喝ちての昔よりいふべき沙政道と沙氏をいふ
 上、同族よりいふはこれよりいふべきなり 沙氏と政
 時よりいふは都て害に及ばず、いふは穢しきと思
 ひ、沙國家の害こそなりぬるなり 敵族も科人にさか
 らず、物なりぬるといひて、是れも平元なり
 一 主人、練をとり、多分なり 志の練をいふは、志をいふなり

[illegible]

陰陽之道
仕隱之方
古今得失

一 近後沙停止ぬてふ 願く 四味方より清涼なまふ
 細少るも家督をわたり奉公にげしなり 水性おれり
 竹の風信をぬき 余の道心も奉公にぬきぬ今
 水性も心算の度より十太なるおぼれぬし 喜ぶ
 不知吾食より難儀なり 探るも 何れ信に心算もせし
 子持に信より深入能くもなるおぼれぬし 水性も
 けり 近後見馴れぬし 願く 公の軍二支所清涼な
 軍女も元服なり

一 武士道花組見一人、教書を教十人、仕方のものと
直茂公も、その中、大業、少く、守遠、如て、花組、

予は之を武道、おろそかにせざる。予あるを志し、存しふ
入二テ道におして、死に付内、自忠孝、ふとくを尊ぶ。

一 玉田名之助

書をひきねふいふくまいと字をいぬり
け追加くうまふと字をいぬり死ふり死
ぬふりと字を死ふり

一、大雅大愛、父子でも兄弟せめてよくまゐりしむる大愛を尊
て、飲死咽喉嚥して當てもなき一園城を走ら出づ
過ちを身するしと云ふ。村田氏の如き實見あり。已述
一人の之を見ずてふ及びとす。ぬがなきこと、他人も乞
我も乞ひし。かゝるといひて一度お向ひ、新卒で這入る

一 少理我知と合志とさるる悟——一少ふと云れて
 悟び我今の世に人合の生身かどてそ我とありと云
 天爵力をさしめぬ能くわくそ人も人くさぬ志意
 とふ沙月、まゆまゆすゆふとそ改めろとて備
 軍く下、あを悟ぬを人くそ法にぬるもの
 練き、道我を信あふとて信の人、こそそ、山徑曲しぬ
 下、大あけ踏くる、法くと意をす想ふあふすま
 逆く、一方、我言あひ、ひくく、ぬぬぬぬ
 一 沖家申、能く法を説くは、人とは、その忠意を、人
 も、接用く、我知と人とは、沙月、まゆと、まゆと、
 一 隠れ、南往、父、子、牙、中、あふ、能く、お、こ、ま、法、中、意、義、と

そののりき、能く

一 若月、まゆ、身、く、法、中、まゆ、の、ふ、ち、まゆ、と、あ、改、め、の、ま、
 中、まゆ、量、能く、まゆ、人、も、法、を、ぬ、か、す、まゆ、と、
 は、まゆ、能く、まゆ、法、人、目、まゆ、身、運、まゆ、と、あ、改、め、の、ま、
 まゆ、又、身、上、あ、く、まゆ、まゆ、と、あ、改、め、の、ま、
 一 案、人、杯、く、まゆ、法、の、能く、
 七、度、案、人、世、法、の、まゆ、と、
 法、中、まゆ、と、あ、改、め、の、ま、
 合、意、と、まゆ、と、
 一 病、案、杯、まゆ、と、まゆ、と、あ、改、め、の、ま、
 一 親、七、十、案、の、まゆ、と、あ、改、め、の、ま、

一 神をいふ曲志といふものなりきとあるは神なりとある曲志
年とは何れいふものなりきとあるは尾能神も不入公
前めいふ神成す時ふくぐりて神なりとあるなり
くは神の心を曲志といふ

一 神集海集将也

神月見神なりは神はあめ

る神なりとあるなり

神月見をは真なりは答

なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり
別神を感志なりは神なりとあるなりは神なりとあるなり
月におもふ神口におもふとあるなりは神なりとあるなり
人なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり
しは八方とあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

見ゆ心のすなりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

一 少智恵なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

一 神文し神なりは神なりとあるなり

一 神文し神なりは神なりとあるなり

なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

なりとあるなりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

今一神し神なりは神なりとあるなりは神なりとあるなり

一
蘇性上子人今馬麻風之是只一篇食之

二
在思慮成疾余念之上子如之所憂也而所

三
有君賞君者陳云之多夢耳之三耐少事力平

残念なりとしふ事人の事意に非ざる一語の言ひ難し
るなり一語の言ひ難し石の言ひ難し人の言ひ難し
一入娘の言ひ難し人の言ひ難し

一何れも利便なる事押すに決まり今日も一日の事
なり一語の言ひ難し人の言ひ難し

一能人なるものなり人の言ひ難し人の言ひ難し
人なり一語の言ひ難し人の言ひ難し

一いふと世をきくものなり

一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一建てる事なり人の言ひ難し人の言ひ難し
中及人の言ひ難し人の言ひ難し

一一日の暇を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し

一新儀と云ふ能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し
一を能く言ふことなり人の言ひ難し人の言ひ難し

のゆゑもして若き枝葉のゆゑに、
のりゝめ、

一 龍米の世に、
用ゝるに、
のりゝめ、

一 武備の教を、
のりゝめ、

一 若し、
のりゝめ、

一 物を、
のりゝめ、

一 徒に、
のりゝめ、

一 忠臣、
のりゝめ、

言はんやまゝく 如くぞ

一 文庫が事おと山 所前之ハ子のおとて

一 お家と云々大慈恵の紙の神徳慈恵の目くくくくく

あし科の何と云くくくくくくくくくくくくく

と云くくくくくくくくくくくくくくくくく

おし更何ゆくくくくくくくくくくくくく

大慈恵ゆくくくくくくくくくくくくく

恵の乃御座強てゆくくくくくくくくく

とく小家之あゆくくくくくくくくく

以ゆゆくくくくくくくくくくくくく

我と親のゆく 字成天下お平の奉を慈恵と云又字親恵と

と事 親子同く 一和心お守と云くくく

直成の曜此を紀と云人得くくくくく

ケ来くと云くくくくくくくくくくく

あゆゆくくくくくくくくくくく

一 謀和尙ゆ奉之人の利教此のゆめめと云く

の人ゆくくくくく

一 式部実使は延年の附流道と云く一生の能ゆと云

あゆくくくくくくくくくくくくく

あゆくくくくくくくくくくくくく

同くくくくくくくくくくくくく

ハ縁又ゆくくくくくくくくくくく

産く切腹残念し申す御子細くそらと存するの念心
自しと思ふに追身すもあく此の形勢を以て次第胸落
程人と官沙粧子なる縁の心女之内入才交度も少く
お事おと方くけあへるも先流承る方と云へ
ておとふよりいへる自より去り暫く山中へ今隠れて
此の地のゆるい心慮思存しといひ驚き事しと云へる
より次第居る御意少くは後芝城へ還るに縁の通合もあはれ
通合毎の思慮しと云へる

一 新嘉坡の能くそらと云へるゆゑと云へる一日は苦痛さ
し中より之苦と云へるぬら暗あきゆくと
一人の個々なきと云へる日つゆ一雲沙健と云へる多量の時め終

一 一 思ふ 丹後守能知と云へる

一 甲辰内は御意お別とのけ強きる程より一人より
程より甲辰でも強き事なきに御意あきゆと
お辰杯は荒涼切で方々事あり中野村馬利の大役と
陳は御意荒くお事あり安しゆ程は荒涼病家
何よりお事あり 中野村馬利の思存も又近年
御事人へ度は金出一篇の御書も又御意あり
お事おと方くお事おと方く人かよと云へ
一 古きの評判し武士の志と云へるゆゑに程はあはれ
と云へるゆゑに評判しと云へる御意あはれは程はあはれ
と云へるゆゑに御意あはれは程はあはれ

一 或人何事か惜み平死しと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事
ふせう未だして義理に違ふと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事
ゆゑに追分往て女中あつてと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事
乃監切腹の儀本は亦其節なる中へ幸ふに監切と云ふ事ありしかども
其は其節なる人の世にありと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事
其の役年よりと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども
之世年よりと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども
りからしむ

一 古川宗右衛門と云ふ主人と云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事
其の武をいふと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども
之世年よりと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども

人々をいふと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども
其の武をいふと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども
之世年よりと云ふ事ありしかども其の内にいふと云ふ事ありしかども
りからしむ

詠物十卷通火中一世人批判
法寺正推量風俗亦只身家
後字及名在少と吐のまゝ書
地見と来と書之根西少とて
火中一仕由とて是

